

昭和52年 5月25日 第3種郵便物認可 令和3年 7月10日発行 (毎月1回10日発行)



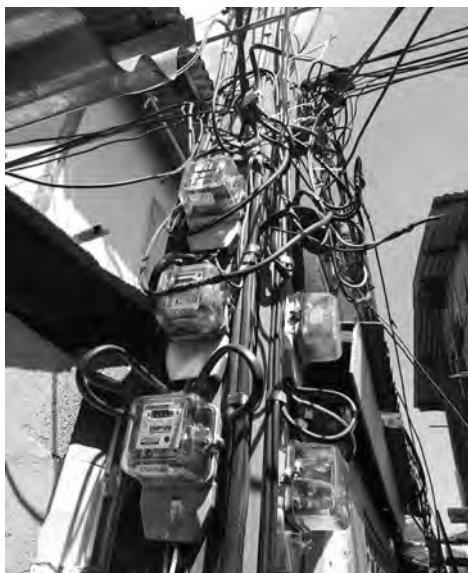
世界の円満
人類の福祉

THE ENPUKU

7月

2021

No.490



世界法民連帯 円福友の会

円福友の会入会のすすめ

1食1円のSABA運動で世界の平和に尽くしましょう。

SABAとは、禅寺の僧堂でお食事の前に、七粒ほどのご飯をお膳のすみに取っておき、後で小鳥に施す「生飯(さば)」というお作法のことです。

これを日本の皆さんの1食1円のSABAとして、アジアの貧しい国々の子ども達のために学校建築(教育)や、井戸やトイレの設置(環境衛生向上)を支援する、国際ボランティア資金の運動です。1食1円ならどなたにもできます。塵も積もれば山となるように、皆さんの御協力をお願いする大きな愛の運動です。(この運動は、特定の政党や宗教や思想に関係のない、非営利の国民運動です。)

綴じ込みの郵便振替用紙を使い年会費やSABA運動等の協力金をお送りください。お送りいただいた皆様には毎月『圓福』と『おもしろやり』をお送りし、円福友の会の活動と円福寺愛育園の子どもたちの様子をご報告いたします。

表紙の写真

2014年にプラティープ財団を訪問した折に、スラムの中を案内してもらいました。

タイの所得はカンボジアの5倍です。でも、スラムの中は、カンボジアのようでした。

写真のように、電柱に取り付けられた配電盤からたくさんの電線があちこちに伸びていました。

火災が心配になりました。

7月号の内容

にこにこ法話 手をつなごう	1 p
ドゥアン・プラティープ財団の40年ースラムの天使の歩みと闘い(その5)	3 p
2021年度 円福友の会支援 クロントイスラム奨学生	6 p
途上国開発協力こぼれ話	7 p
大心 「山門に立つ」	11 p
敬愛信 船橋からのたより	16 p

ニコニコ法話



今年も、来年のお正月のポスターを考えなければならぬ時期になりました。光陰は矢よりも速やかなりですね。月日の経つのは早いです。

昨年に引き続き、宮城県の石上彫刻工

房から、お地藏さまを求めることにしました。今年は「手をつなごう」です。

手をつなごう

差点、篠ノ井駅二階通路で「おはようございます」のあいさ

つなごうで、人と人とのつながりが薄くなっているませんか？

私は、平成二五年に始まった篠ノ井あいさつ運動の実行委員長を務めています。支えあい認めあい励ましあう、あい

さつがつくる“あい”の町篠ノ井づくりです。区長さんがあいさつ運動推進委員長となり、篠ノ井商工会議所、篠ノ井ライオンズクラブ、保護司会、更生保護女性会などの諸団体に呼びかけて、毎月一日をあいさつの日として、稲荷山駅、六つの小学校の校門付近、中央地区の交

つの声掛けをしてきました。登校する小学生的の見守りを兼ねています。篠ノ井駅二階通路には、中高生や一般の皆様が一〇〇人以上も参加するようになり、街の活性化の例として、その視察に県知事さんもおいでになり、生徒と交流してくださいました。あいさつを返してくださる人も増えて盛り上がっていたのに、昨

ニコニコ法話

年四月から中断になってしまいました。残念です。

地域の春秋のお祭りも、運動会も、文化祭も、避難訓練さえ中止です。いろいろな会議も、書面開催か中止です。私は、保護司を拝命しているのですが、昨年は

社会を明るくする運動もできませんでした。街頭行動でカット絆やチラシをお渡しするので、手から手へとコロナがうつっては困るのです。

ワクチン接種がはじまりました。少しずつ人と人との交流がはじまりました。さあ、もう一度新たに手をつなぎましょう。手をつ



なぐことを意識しましょう。そして、これまで培った人間関係を深くするとともに、新たな絆をつくりましょう。ポスターにそんな願いを込めたいです。

(円福友の会会長 藤本光世)

ドウアン・プラティープ財団の40年

「スラムの天使」の歩みと闘い（その五）

巻頭報告

貧困に苦しみ人々・子どもたちと歩み続けて着た四〇年

プラティープ・ウンソントム・秦

一方、ドウアン・プラティープ幼稚園では、一〇年前から日本のボランティア団体「エルセラソン1%クラブ」のご支援でモンテッソリー教育を導入しています。この教育方法は、子どもたちが幼いときから集中力と自立心を培うメリットがあり、クロントイスラムのように厳しい環境下にある園児たちにとっては最も大切な力を身につけるのに役立っています。すでにタイ政府教育賞の教育基準局より全国でも数少ない優秀賞を受賞しています。

人には誰しも等しく可能性があります。その

可能性を拓き、伸ばすチャンスを一人でも多くの子どもたちに与えたい。子どもたちの心に希望の灯をともしたい。その一心で、四〇年間歩んできました。スラムに住まなければならぬ人々に対するタイ政府や社会の見方も、いくらかは改善されてきました。私たちはこれからも同じ人間同士として、貧しい人たちの秘められた可能性や情け深さに気付き、貧しい人たちとともに考え、計画し、実行する。そしてその結果を讃え合い、より良い社会を築いて、貧しい人たちの尊厳が守れるように働きかけ続けます。



モンテッソリーの教材を使って学ぶ子どもたち

三、「貧しさの中に生まれてきたのは、私の過ちですか？」

ある日、ヌー・ケーマーおばさんの大きな叫び声が住民の立ち退き要求のためにクロントイスラムに入り込んできた役人たちの真ん前でまともに響き当りました。

「貧しさの中に生まれてきたのは、私の過ちですか？」

ヌーおばあさんが亡くなりもう随分経ち



クロントイスラム

ます。しかし、ヌーおばあさんのこの言葉は、当時その場に居合わせた私の耳元で今でもこだましています。

答えはむろん「ノー」ですが、貧しい人々をどう受け止め、位置づけるかはタイ社会の歩みの中で変遷しながら今日があります。

仏暦二五〇四年（西暦一九六一年）に開始されたタイ国の経済社会開発計画によると、「貧しい人たちは」、開発という儀式的奉納物のように扱われていました。経済発展が起こる時には、何かその引き換えがあるものです。当時のタイ政府の役人たちは（今でさえもそうかもしれませんが）、貧しい人々を祭り上げながら上層部を発展させれば元が取れるだろうと見ていました。それは豊かさが上から下に流れて、貧乏人も仕事を得られれば、自動的に貧しい者は無

くなるだろうという見通しからくる考え方でした。

もちろん、この時代遅れの理論が、まるっきり間違っていたとは言えませんが。と言うのも国の経済状況をみると、少なくともタイ人の収入や生活水準は少しずつ向上してきたことが経済指標の数字から読み取れるからです。しかし、仏暦二五五八年（西暦二〇一五年）にもまだ「貧しい人たちが四百八十四万七千二百人いると国家経済社会開発庁等の統計に示されています」。

これまでの開発は、開発が引き起こした皆さんの傷すなわち問題を放置して今日にいたっています。貧困という逆境から逃れるために苦闘しながらもバンコクへと移住して来た地方の農村などの人たちは、工業、産業部門の肉体労働者となって国の経済を前進させる歯車となりました。しかしそれは、今に続く低賃金、低水準の生活を土台にしており、人としての尊厳など少しも考慮されていないのが現状です。首都

バンコク最大のクロントイスラムは、その開発プロセスの息吹きの証しであり、昔も今もしっかりと私たちの目の前に存在しているのです。

「昔は、スラム外の人たちは、私たちのことをゴミだとみなしていました」

この言葉は、ヌー・ケーマーおばあさんの娘であるサーウォンおばあさんが今の世代の人に伝えたかったことです。この「ゴミ」は、「都市に住む貧しい人」の呼称に変わろうとしています。『人』と言う言葉に都市に住むという形容詞を付けて都市に住む貧しい人の様子を表現しようとしているのです。貧しい人たちが社会に足を着けて立ち、国にその存在が認められるまでに実に四〇年もの時間が費やされました。それはいつも前進したり、つまづいたり繰り返しの四〇年でした。（続く）

次回は「クロントイの歩み」です。クロントイの歴史と、クロントイスラムがどのような経緯でできたかが記されます。

2021年度 円福友の会支援 クロントイスラム奨学生 (次号にも続きます)

こんにちは。僕はカチャイン・ポンラムジイアックです。里親様には僕たち奨学生のために教育奨学金を支援いただき、本当にありがとうございます。僕たちは里親様のご厚意にとっても感謝しています。家庭の事情から本来ならば学ぶ機会がなかった僕たちがこうして大学まで進学することができました。僕の成績は決して良い方ではないのですが、全力を尽くすよう努力し、理解するように心がけていきます。里親様には心より感謝いたします。敬意をこめて

カチャイン・ポンラムジイアックより



6500

奨学生登録番号

6500/531/M

名前

カチャイン・ポンラムジイアック

学年

大学2年生 (2021年度)

こんにちは。私はベンジャポーン・ターウォンバンディットです。この新学期から大学1年に進学します。この大学は当初から入学を希望していたところなのです。第二次試験では80人中30人しか取らないといわれていました。そして、第二次試験は面接ということで、私はとても緊張しました。友だちと頑張ろうと言い合い、最終的に合格できました。クラスの中では最初に決定しました。私の専攻は体育学科です。これから国内での試合があつたりするので、頑張つていきます。敬意をこめて

ベンジャポーン・ターウォンバンディットより



6450

奨学生登録番号

6450/523/F

名前

ベンジャポーン・ターウォンバンディット

学年

大学1年生 (2021年度)

途上国開発協力こぼれ話

⑫ いくつかの小話

円福友の会顧問 吉田恒昭

私が主にアジアの途上国を走り回っていた年代は1970年代後半から2000年頃までの約30年間です。ですからこれからお話しする小話の幾つかは最近の途上国ではもはや通用しないかも知れません。

先ずは美しい夕日の話です。マレーシアの西海岸のマラッカ海峡に臨むクランという港町で鑑賞した夕焼けの話です。マラッカ海峡に沈む夕日はバリ、マニラに並ぶ世界三大夕日の一つと言われています。毎夕美しい夕焼けが見られるわけではなく、夕日が沈む西の方角の空の微妙な気象条件によつて異なり、西の空一面に広がり時々刻々変色する極彩色の美しさが決定されます。西の海に沈みつつある赤色の太陽は周囲を橙色に染めながら広く紫雲を生み出します、そして刻々と周

囲の雲の色を重層的に変化させつつ七変化します。そして、それらの色は次第にグラデーシヨンしながら静かな暗闇へと幕を閉じます。この情景の中に人々は亡き両親親類や鬼籍に入つた友達の面影を重ね合わせます。子供時代に遊び疲れて母チャンの暖かい夕食が待つ家路へ急いだ自分の姿が夕焼けに重なります。私がクランで鑑賞した夕焼けは「極楽浄土は西方に在り」を十分に納得させる景観でした。仏教がインドで生まれ涅槃浄土信仰が人々の間で広まると、信心ある人々は日々の四苦との戦いで悩みつつも夕風時に西方に現れる薄い七色の夕焼けの遥か向こうに来世の極楽浄土ありと信じ、たに違いないと私は思いました。古来、日本を含めて



マラッカ海峡の夕日 (WEBより)
カラー写真でないのが残念です

アジアの人々は西に沈む夕日の景観に西方極楽浄土の来世を信じ、大きな深呼吸ができたのではないでしようか。私たちも日常の散歩で美しい夕焼けに出会う喜びを味わいたいものです。

この港町クランで調査団一行は政府が運営するバラック（兵士のための平屋の宿泊所）に寝泊まりしていました。排水事業が必要な港町ですからバラックの周囲は草の生茂る湿地帯でした。日中の戸外調査は疲れます。夕食を町の食堂で済ませて、早々にバラックに帰り就寝と相成ります。床に着けばボタンキユーです。ところが夜が更けるにつれて、寢室の窓外から「モウモウ」とウシが啼くような騒音で目を覚ましてしまいました。窓を開けて草むらに目を凝らすと、そこらへん一帯に無数のカエルなのです。大きさは手のひらサイズですが、その鳴き声がウシなのです。翌朝に現地スタッフが教えてくれた名前はウシガエルでした。安眠を妨げられた私はトイレにあったバケツに水を満たし「お前たち、

あっちで鳴け！」と叫びながら窓外に向かつて思い切り水をまき散らしました。

暗闇の中で一瞬の沈黙です。しかし、この沈黙は再び一匹の用心深いカエルのモウの独唱から始まり、それは次第に重なり合つてウシカエルたちの歓喜の大合唱に変わっていったのです。

冷静に考えれば、カエルたちは私が撒いたバケツ一杯の水を合唱のお礼だと思い込んだに違いありません。イヤー参りました。かといつてお湯を沸かして彼らに熱湯を撒き散らすのはあからさまな動物虐待となり皮膚の敏感なカエルにとつては生死の沙汰です。昔、小学校の理科の先生が「地球が人間様だけのものだと思えばがるのは無礼千万で、それではないずれ人間も滅びます、生きとし生きるものが地球の恵みを分かち合うもの、草木（山川）



牛ガエル

国土悉皆佛性（成仏）！」と教えてくれたことを思い出します。仕方なく、カエルの第九歓喜の合唱を聞きつつ眠りに入る厳しい修行となりました。ちなみに牛ガエルは東南アジアでは食用に養殖されています。後日に現地レストランのメニューで牛ガエルを見つけて食しました。それは後ろ足に香味を付けて焼いたもので二ワトリのような味でした。

途上国で安宿に泊まると日本ではありえないことに少なからず出会うものです。熱帯の夜は蚊帳が無いと安眠は困難です。蚊帳がない場合は持参する蚊取り線香を炊いて寝ることになります。日本のキンチョウ蚊取は正露丸と並んで途上国出張には必須アイテムなのです。バングラデシユの田舎に出張した時の話です。蚊取線香は途上国でも現地製造販売しておりましたので、それを用いて就寝したのです。ところが蚊が線香の煙の中で元気に喜んで飛び回っているではありませんか、これには参りました。キンチョウ蚊取ですと煙に触れた蚊はポトリと床に落下するのです

が、現地生産の蚊取線香の煙に蚊たちはすっかり慣れてしまっていたのでしょうか。一方、日本の蚊取り線香に不慣れな東南アジアの蚊たちはその強力な煙にたちどころに氣を失って、殺生お許しくださいと祈るほどにポトンと床に落ちてくるのでした。蚊取線香は日本製に限ります。

インドネシアのジャワ島農村視察で村の木賃宿に暗くなってから投宿した時の話です。部屋には裸電球が壁に取り付けられているだけでした。その電球は10ワットぐらいです。で部屋で読み書きが不可能なのです。この当時の農村出張では私はいつも60ワットぐらいの電球をスーツケースに入れていました。この時も部屋に入るとすぐに電球を取り換えて明るくしようと暗闇の中でいつも携行している小さな懐中電灯を頼りに壁の電球を取り換えて、点灯のスイッチを入れた途端に、何と木賃宿全部（20室ぐらい）が真っ暗闇となつてしまいました。ヒューズが飛んだのです。あわてて電球を元に戻して、イヤー参ったと

反省をする間もなく、すぐに停電は回復し安堵しました。ヒューズが飛ぶのはこの木賃宿にとつては慣れつこだったようです。この事件があつてから電球交換は控えることにしました。

カンボジアの安宿（ゲストハウス）に投宿した時です。電熱温水器付きシャワー完備を売り物にしていました。蚊帳はありませんでしたが、念のため先ずは蚊取り大作戦を行い、一息してから、久しぶりの温水シャワーで洗髪と張り切つてシャワーの栓をひねります。いくらたつてもお湯にはなりません。どうも電熱温水器が故障のようです。温水器には立派な商標が付いており、そこにはNationaleとロゴが入っています。もう一度ロゴを確かめるとNationaleではなくてSperlの最後の数文字がnalではなくてnaleなのです。そう言えば、カイロで買ったスニーカーはAdidasではなくてAdidahであつたことが頭に浮かんできました。市場では有名メーカーの商標に似たラベルを付けた模造製品が沢山売られて

います。温水を諦めて水のみでシャンプーし、泡が髪の毛一杯を覆つた頃に、今度は水が止まつてしまつたのです。そう言えば、マニラの自宅でもシャンプー時に断水で妻が大声で叫んでいたことを思い出しました。途上国の生活では停電断水は日常だったのです。しかし、このような状況でも困らないのが途上国です。トイレには必ず大きなバケツに満杯のきれいな水が備えてあるものです。バケツが無い場合はボーイに頼めば喜んで水を運んできてくれます。彼らにとつては予想外のチップとなりません。このような状況でチップをケチつてはいけません。チップはノーブレス・オブリージュ（仏語）noblesse oblige「高貴なる者の責務」となるのです。

途上国の旅では予期せぬ想定外のことの連続ですが、慌てず焦らず諦めずの（3つのあ）で臨み、その場にあつては一息ついて、何故に「かく言うこと」が起るのかの理由を奥深く考えることが肝要で、開発協力支援の真髓であり心構えなのかも知れません。

大心 圓福

自身が生まれ変わるといふこと

大本山永平寺安居を終えて

藤本 大心

「山門に立つ」

先月は永平寺事前研修について書かせて頂きました。その後、永平寺の鳴らし物と偈文（げもん）、応量器の作法、様々な威儀（いぎ：身なり）など復習していききました。初めて円福寺の参禅会に参加させて頂いたのもこの頃です。その時は足がしびれてしまいこのままではまずいと仕事が終わると毎晩坐禅や正座をしていました。当初正座は十分く十五



3/29 円福寺出発 上山の威儀
※胸にあるのが袈裟行李です

分じつと座っているとしびれて立てなくなるくらいでできませんでしたので、大丈夫だろうかとそれが一番心配でした。偈文や鳴らし物は自分の声を録音して通勤中に毎日聞きながら覚えしました。三月に入ると当時は円福幼稚園の園長を務めさせて頂いておりましたので、来年度にとにかく迷惑がからないように必死に日々を過ごしていました。卒園式も終わってからの永平寺上山になりましたの

で、その年の最後のグループでの上山でした。永平寺への上山はグループ毎に決められた日に最初に訪れる地蔵院に向かいますが、私は平成三一年度最後の六番目のグループでした。地蔵院へ向かう前日の三月二八日に父に髪を剃って頂き、初めて坊主になってお坊さんになるんだ……と、急に現実味がわきましくて、その晩は住んでいたアパートに戻り、不安や緊張であまり眠れませんでした。何より坊主になった自分を受け入れる時間も無いままに当日を迎えました。当日の朝、父と不慣れな状態で本堂にてお勤めをしまして、一暁師と兄が永平寺まで車で送ってくれました。永平寺門前の東喜家に立ち寄りましてそこで二名の上山予定の仲間に出会いました。一暁師が、この二人とは今後とても深く長い付き合いになるはずだから仲良くなっておこうと二人と私と話す時間を作ってくれました。この二人のことを思い出すと苦しかった日々がどんどん思い出されてなんとも言えない深い

気持ちになります。この二人だけでなく平成三一年の同安居の仲間は、かけがえのない存在です。

到着順で地蔵院に出発するということで一人ずつ向かいました。先に二人がそれぞれ向かいまして、私もここまで準備を一緒に手伝ってくださった一暁師と兄にありがとうと伝え、激励されて振り返り門前の坂道を上っていききました。地蔵院は門前の通りを抜けた左手にありまして、到着したら始めに木板（もつぱん）を三打して到着した事を伝えるように事前に指示がありました。地蔵院前に行きますと先に行った二人とその前に三人が直立して硬直した状態でいました。その姿にただならぬ空気を感じまして、木板を鳴らさなければと恐る恐る入口を見ますと、そこに立っていた古参和尚さんがいきなり「木板を鳴らせ!!」と私に怒鳴ってきまして、「はい!!」と慌てて顔を見上げて目を見ると「目を見るな!!!」と追加で叱られました。

急いで木板を三打しました。この時私を叱つた古参和尚さんには一年後に私が後単行寮に配属になった際に大変お世話になるのですが、それはまたいずれ書かせて頂きます。その後私も指示されて直立硬直状態で立ちました。(皆が直立だったのはきつと怒られたのでしよう……) その後二名後から来まして、七人になったときに古参和尚さんが「ここから先、余計な私語は一切してはならない、古参和尚さんの目を見て話してはいけない、聞かれたらはいかいいえのみで答え、何か言いたいことがあるときは合掌して待ちなさい」と言いました。そして一人ずつ大きな声で名前を名乗るよう指示されました。そこは門前の通りのすぐ横ですので、参拝客がたくさんいる中、私は全力で「長野県！八六番！円福寺徒弟！藤本大心！呼び名、慈忍です……！」と叫びました。私より前の者は声が小さくて叱られていましたので、これでもかという声を出しました。その後、中に入り本堂で「拝

宿、並びに威儀点検と上山教示よろしゅう」と挨拶をした後、本堂の奥に通されまして、そこは十畳ほどの部屋で壁に机が並んでいました。古参和尚さんが「到着表を書いてもらうのと話があるので呼ばれた物についてはきなさい。その他の物は正座で待ちなさい」と言いました。私は六番上山の五番目でしたので、五番目か……と待っていると一人十分程度でしようか、なかなか自分の番がやってこないのです。正座に慣れていなかった私はこの時点でどうして正座にもつと慣れて来なかったのだろうと大変後悔しました。古参和尚さんに監視されており足をずらしたり横を見ることはとても許される状況ではなかったのですが、激痛に耐えておそらく四十分くらい経った頃にやっと呼ばれました。五番目でよかったです。六番上山は全員で七人でしたので、それ以上後ではもはや足が持ちませんでした。(私が一番正座苦手でした) 部屋に入る前に、座つて襖を開ける作法、入つて襖を閉める作法な

ども前もって教えられていましたのでその通り行い、緊張しながら入りますと古参和尚さんが三名いらつしゃいました。何を話したかはほとんど忘れてしまいましたが、心配な事なども聞かれましたので恐る恐る正直に正座が心配ですと伝えますと、徐々に慣れるから大丈夫でしょう。と言われたのを覚えています。地藏院での威儀は常に直綴（じきとつ：着物の上に黒い衣を着ている状態）でして、寝るときは着物、掃除するときは着物を腰紐で縛り上げます。食事の作法、掃除の作法、おつとめの作法を教えてください、上山の威儀についても指導を受けました。その際に袈裟行李（けさごうり）を開けて中に入っている物の確認をしました、この袈裟行李は一度開けてしまうと再度戻すのはなかなか難しく、自分でしっかりと準備していかないとできません。私は事前に自分で出来ないといまづいような嫌な予感がしておりましたので自分で出来るようにしていったのですが、一緒になっ

た者の中には全く戻すことができず、中に入っている物も足りないものがあり、古参和尚さんに散々怒られていました。この人今後大丈夫かな：と横目にとても心配したのですが、後に上山後に私が準備してきたことなんて周りにあつさり抜かれてしまい、自分の出来なさを痛感していくのですがそれはもう少し後に書かせていただきます。

二日目の朝、お世話になった古参和尚さんよりお話をいただきました。「永平寺の古参和尚さんはこんなに（地藏院の古参和尚さんほど）甘くないから、気を引き締めていきなさい。そして返事をしっかりとしなさい。それがやる気があると認めてもらえることになります。頑張りなさい」その後、たくさん叱られていた同安居の仲間は古参和尚さんに頑張れよと激励されておりまして、これから始まる永平寺の修行の過酷さを感じました。朝六時、永平寺に向けて上山の威儀で地藏院を後にし、一列に並び七人で山門に向かいました。

到着したところで木板を六番上山の一番の和尚が三打しました。すると客行（かあん）和尚さんが出てきて私たちに問いました。「木板を叩いたのは誰だ、何をしにきたのか！」ここから先は皆様もご存じのように覚悟を試す問答が始まります。一人ずつ順番に問いかけられまして、私は「自己を見つめ鍛えなおすために来ました」と言つたように思いますが、「他の寺院でも修行ができるだろう！なぜ永平寺なのか！」というように返され全員論破されてしまいました。「覚悟がないものはこの門を潜ることは許されない、もう一度考え直しなさい」と言い残し、そのまま客行和尚さんはどこかに行つてしまいました。すると永平寺の廻廊清掃で山門の長い廊下にごこれから修行僧たちが集まつてきて全力で雑巾がけを始めました。その全力で掃除をする修行僧の姿を見て、この先の事を思うとついでいけるだろうかと身が引き締まりました。待つこと一時間くらいでしょうか、左手には

坐蒲（ざふ）を持ち、直立のままでしたので結構疲れていたと思うのですが、大変緊張していたためにあつという間に時間が過ぎて客行和尚さんが戻つてきました。そして「覚悟がある者はこちらに來なさい」と話されて、全員山門を潜りました。その後、正面の仏殿に向かつて袈裟行李を置いて三拝しました。暫到（ざんとう）到着所に向かい、足を洗つて旦過寮（たんがりよう）に連れていかれました。旦過寮は永平寺に到着したものが最初に通される場所です。一週間の間、永平寺の修行に耐えられるか、僧堂に入堂出来るかどうか試されます。この旦過寮で私は限界を感じ一度心が折れそうになるのですが、一緒に上山した仲間の姿や逃げ場のない自分の立場に踏みとどまることができました。それはまた次回書かせて頂きます。ありがとうございます。

敬愛信

船橋からのたより

圓福寺参禅会会員の太田英行さまが船橋市へ異動になりました。単身赴任です。

太田さまからのおたよりを紹介します。

ご丁寧なお便りに恐縮しております。

今週は「長野出張」が二回あり、週末は自宅滞在で第一曜日は参禅会といきたいところですが、地区一斉のせぎざらいです。毎年六月は参禅会欠席なのであります。

前回船橋のマンションごみ集積所を清掃したことを書きまし

たが、もう少しその後のことをご報告申し上げます。

実は生ごみを散乱させているのはカラスで住人は網をかぶせているのですがそれでも袋を引っ張り出してひどい状態になつてしまふのでした。比較的管理の行きとどいた建物でもあり、清掃もしてくれるのですが、たぶん住人も気になつていたのでしょう。小生が片付けたのは日曜日の三回だけでしたが、最近集積場が見違えるほどきれいになりました。カラス対策が徹底されて、住人たちがこのエリアを清潔に保とうとする気持ちが集集したかのようです。わずかな行動が心を通わせたように嬉しいというよりびっくりしています。誰が住んでいるのかもよくわからない四〇世帯ほど

のコミュニティですが素晴らしいことだと思いました。

圓福寺の教え、藤本先生のおかげだと感謝申し上げます。愛育園の子どもたちのように、小生も成長しているように振り返っているところです。はきものはいつもそろえています。おそうじも少しはしています。身の回りの環境を整えることを時々以上に意識しています。

すべて藤本先生のおかげです。ありがとうございます。これからリモート参禅会を自宅仏壇で行つて、六時にせぎざらい、昼には東京着でまた一週間が始まります。

今後ともご指導よろしくお願い申し上げます。

合掌

六月六日 午前三時

〇〇五二〇一七一六二五六

円福友の会・SABAスクール

愛の日の丸 SABA運動

カンボジア小学校校舎建設

カンボジア エコ村支援

タイ スラム街奨学生支援(教育里親)

大災害被災地支援

シャンティ国際ボランティア会協力

おもいやりの会(愛育園児童自立支援)

太平観音堂護持発展

円福友の会入会のすすめ

上記の協力金は 郵便振替 00520—7—16256

加入者 円福友の会 あてに御送金下さい

〒388-8005 長野市篠ノ井横田 円福寺内

TEL 026-292-0381

FAX 026-293-9629

<http://ryu-enpukuji.com/tomonokai/>

enpuku2@janis.or.jp